

モンゴル人とペアを組んで 「スーホの白い馬」の発展的学習に取り組む

元横浜市立小学校校長 柏村 茂

1 外国人とペアを組んでの国際交流活動

平成六年三月に小学校を退職したわたしは、在職中から関係していたボランティア団体に加わりました。この団体では、「国際交流活動」として、日本人と外国人がペアを組んで、依頼を受けた学校などを訪問し、当該国の自然や文化を紹介しています。これまで横浜市を中心とした小・中学校、PTAなどを活動の場としてきました。メンバーは、日本へやってきた留学生や、日本人と結婚した在日外国人の方、そして、外国で生活をした経験があったり、外国語が堪能な主婦や学生を中心とした日本人など、合わせて五十人ほどで成り立っています。

しかし、外国人を教室へ招き入れるだけで国際交流のめあてがまっとうできたのは過去のこと。しかも、外国人講師が各学校に配置されている横浜市では、「外国人と触れ合う」という目的での活動の場がしだいに閉ざされつつあるのが現状です。

そこで、活動内容を精選する必要を感じたわたしたちは、発展的学習に活動の場を定めました。例えば、「おおきなかぶ」（ロシアの物語）、「スーホの白い馬」（モンゴルの物語）、「三年とうげ」（韓国の物語）などの国語教材や、社会科学の学習に関連させ、それをふくらませることができるよう国際交流活動しようと考えたのです。

ここでは、その取り組みの実際を、国語科「スーホの白い馬」を例に報告します。



民族衣装を着て説明をするモンゴル人講師と筆者

2 「スーホの白い馬」(二下)の発展的学習の実際

発展的な学習の目的は、言うまでもなく「国語科への興味・関心がいつそう高まることをめざす」ことにあります。「スーホの白い馬」に当てはめて言えば、子どもたちに、物語の背景にある豊かな自然やその中で練り広げられる人々の生活に目を向けてほしい、そして、それらを通して物語をより深く理解してほしいと考えました。

また、この物語は、少年スーホと白馬との心の交流を描きながら馬頭琴の由来を述べています。子どもたちに本物の馬頭琴に触らせたり、その音色を聞かせたりして、物語のイメージをさらに広げてほしいとも考えました。

そこでまず、メインの講師を、モンゴル人留学生の方にお願ひし、わたしはアシスタントとしてサポートに回りました。彼女にモンゴルの民族衣装をまっとうもらい、子どもたちが物語に入り込みやすい雰囲気を出しました。

発展的な学習とはいえ、教科書教材とは付かず離れずが原則です。そこで、活動の柱として、

○スーホのくらし

○馬頭琴の由来

に焦点を当て、教科書の原典になっている絵本『スーホの白い馬』（福音館書店）の挿絵を使って物語の筋を追いつながら、子どもたちがさらにイメージを広げられるような展開を工夫しました。

クラス全員に見えやすいように拡大した絵本の挿絵を示しながら、筋の展開はアシスタントのわたしが担当し、大切どころやキーワードは、講師のモンゴル語とわたしの日本語でゆっくりと読み合うことにしました。聞き流すだけに終わらないよう、キーワードは大きく模造紙に書き出すなどの配慮をしました。そんな流れの中で、ポイントとなるところに、以下に示すようなさまざまな活動を取り入れました。



モンゴルの民族衣装を着た子どもたち



モンゴルの高校生に授業をする筆者



実際に馬頭琴を弾くモンゴル人講師

○スーホのくらし

- ・まず、世界地図と、模造紙にかいたアジアの地図で、モンゴルの位置を確認しました。
- ・物語の背景となるモンゴルの広大な自然を感じてもらおうと、写真を何枚も用意しました。風景だけでなく、スーホが追ったであろうたくさん羊の群れも忘れません。
- ・クイズをいくつも用意し、楽しくモンゴルや遊牧民のくらしについて知ることができるようになりました。
- ・モンゴルの遊びをいくつか紹介しました。国は異なりますが、同じアジアにあるモンゴルと日本には似たような遊びがあることがわかり、文字通り国際交流につながっていききました。
- ・モンゴルの民族衣装を実際に子どもたちにも着てもらい、そこからスーホの生活や気持ちを考えてもらいました。

○馬頭琴の由来

- ・本物の馬頭琴を持参し、子どもたちに見せたり触れさせたりしました。
- ・馬頭琴の紹介に合わせて、その音色を紹介することも欠かせません。「草原のチェロ」と言われる馬頭琴のCDを用意し、楽器の紹介に添えることにしました。
- ・どんな音が出るのか、講師に子どもたちの目の前で馬頭琴を弾いてもらいました。

活動に当たって、子どもたちの興味はこの馬頭琴に集中しました。中には、馬頭琴は、教科書の文中にあるように、馬の骨や皮、すじや毛だけでできているものだと思いついでいる子もいたため、本物の馬頭琴を見て驚いたり、感心したりしていました。

活動全般に要した時間は二単位時間（九十分）。二年生にはちょっと長すぎたかもしれないという反省もありますが、担任の先生方のご協力で成し遂げることができました。

3 活動を振り返って

物語を読むだけでも子どもたちは想像し、イメージを広げることができましたが、それに加えて、当該国の方が写真や実物を持参し、実際に見たり触れたりしての活動はたいへんにインパクトの強いものになります。

しかしながら、いくら珍しいモンゴルの情報でも、先に述べたような活動の一つ一つを、何の脈絡もなく思いつきのようにやっていったのでは、物語は広がっていきません。

そこで、活動をつなぐ軸として、絵本『スーホの白い馬』を設定し、モンゴル語と日本語で物語の展開を追いつながりながら活動したことで、子どもたちは自然と物語の世界に入り込み、イメージを広げ、読みを深めることができたのではないかと思います。

事後、子どもたちの感想に目を通してみると、物語のクライマックスである、悲しみの中で馬頭琴を作る主人公の行動に寄せる感想がたくさん集まりました。「もっと、モンゴルの物語を読みたい。」「動物と人間の登場するお話を読んでみたい。」「などの記述もあり、わたしたちがこの活動で意図していたことが全部うされたのではないかと考えました。

4 活動の余話

今年の夏休み、モンゴルの高校で日本語を学ぶ生徒たちに授業をする機会に恵まれました。日本語がまだ十分に身につけていない生徒を相手に、どんな読み物を、どんな形で紹介しようかと考えに考えて、「かさじぞう」と「おむすびころりん」の二つの民話を選び出し、手製の紙芝居に仕立てました。民話の底に流れている日本人の優しさを伝えたかったのです。

これに対して、いくつかのマスコミからの取材を受けましたが、取材のとき、記者の方々が口々に言った言葉が忘れられません。

「懐かしいなあ。ほくもこの『スーホの白い馬』を勉強したんですよ。」と。